

第3章

中卒者、高校中退者の就業実態

大阪市立大学創造都市研究科 研究生
後藤 卓己

3.1 はじめに

聞き取りを行った不安定就労・不安定住居者のほとんどの学歴は、高等学校卒業以下の学歴であった。現在では、大学卒業と言うだけの学歴では就職に不安を感じ、大卒の学歴とともに何らかの資格をも取得しようと考えている学生も存在する。そのような現状の中で、就業条件の最も厳しいと思われる高校卒業未満の学歴で就業していかざるをえない人たちを中心に、その問題点について今回の聞き取り調査から考えてみたい。高校卒業未満で就業していった人たちの割合は以下のものであった。

最終学歴がはっきりしない人もいたが、全聞き取り調査者 100 名中の 22 名が中学校卒業者であった。年代別に見ると、20 歳代 5 名、30 歳代 13 名、40 歳代 2 名、50 歳代 2 名であった。高等学校の中途退学者は、9 名であった。年代別に見ると、10 歳代 1 名、20 歳代 3 名、30 歳代 3 名、40 歳代 1 名、50 歳代 1 名であった。ともに 20 歳代から 30 歳代に集中しているが、どの年齢層にも高校卒業未満の学歴の人が存在していることがわかる。全員が男性であった。大阪府出身者は 30 % くらいで、他府県出身者も多く存在していた。高等学校卒業未満で働かざるをえない人たちの存在は、全国的、全世代的に見られる状況と考えてよいのではないだろうか。全員、何度も職を転々としているが、最初にどのような経緯で就業していったのかという部分に焦点を当てて見ていくことにする。

3.2 中学校卒業者の実態

3.2.1 就業先について

中学校を卒業し、就業している人たちがどのような職に就いていったのか、その実態を年代別に見てみたい。

20 歳代の人たちの場合 「鳶の仕事に就いた」、「トヨタ系列の会社に就職した」、「親の決めた新聞配達を行った」、「両親から就職を勧められ、居酒屋に正社員として勤めた」、「求人誌を見て、吉野家のアルバイトを始めた」。

30 歳代の人たちの場合 「アルバイトが多く、就いた仕事の多くは建設関係であった」、「親戚の所で大工、鳶の仕事を行った」、「家業の解体屋を手伝った」、「学校の紹介でいくつかの職業に就くが、正社員

ではなかった」、「兄の知り合いの居酒屋に就職し、板前として住み込みで働いた」、「タレントとしてレポーターなどの仕事を行った」、「学校の紹介でゴルフ場に正社員として就職した」、「水道管を作る工場に勤めた」、「料理の仕事に就いた」、「親戚が自営している自動車整備工場に働いた」、「学校の紹介で松下電器下請けの会社に正社員として就職した」、「担任の紹介で、従業員 25 人くらいの大阪の紡績会社に就職した」、「学校の紹介で自動車部品の製造会社に就職した」。

40 歳代の人たちの場合 「父親とともに神奈川で出稼ぎの仕事を行った」、「自分で見つけた紙加工会社に就職した」。

50 歳代の人たちの場合 「従業員 20 人くらいの規模の板金屋に正社員として勤めた」、「縫製工場へ就職した」。

50 歳代の人の場合は、一応 2 名とも正社員として就職できているようであるが、正社員として就業できていないケースが全体の半数以上にのぼるとみられる。正社員として就業していない人たちは、アルバイトや親の縁故による就業というケースが多いことが伺える。正社員として採用されている者も、中小の会社、個人経営と思われる職場がほとんどである。

給料の面については、「中卒なので残業をさせてもらえず、月 7 万円ぐらいの収入だった」、「親戚が自営をしている工場だったので、給与は特に決まっておらず、必要な時にもらっていた」と語る人がいたが、他の人たちの中にも厳しい状況があったのではないかと推測される。

地方都市である長野県と大都市である大阪市の現役中学校の中堅教師に中学校を卒業し、就業していった生徒たちのことについての話を聞いてみた。長野県の教師の話によると、ほとんどが高校へ進学し、中学校卒業時に就業していく生徒は、その教師の担任経験の中ではほんの少数名しかいなかったとのことであった。就業希望者については、ハローワークを通すようにしているが、ハローワークで中学校卒業の生徒を受け入れるような就職先はかなり少ないとのことであった。長野県の場合は、工場が多いとは言えない上に、交通のアクセスが悪いため、自動車免許が取得できない中学校卒業時の生徒にとっての就職先はかなり限定されてくるようである。親の縁故で就職先を見つけてきた場合であっても、就職後の労働条件などの事も考えて、できるだけハローワークを通すようにしているとのことであった。技術専門学校などに進学を考えている生徒にとっては、中学校卒業の学歴で受け入れ可能なコースが減少してきているという厳しい実態があるようである。大阪市の教師の話によると、若干名は中学校卒業時に就業していく生徒がいるとのことであった。その場合、ハローワークを通して就業していく場合と親の縁故でそのまま就業していく場合があるようである。

中学校教師の話から、正社員として就業してっていないケースがみられるが、ハローワークを通した就業であっても、実態は親の縁故による就業と思われるケースが存在していることが伺える。

3.2.2 家庭環境について

中学校を卒業し、就業していった人たちの家庭環境について見てみたい。

- 「小学校の時に両親が離婚し、夜逃げをすることとなった。父親に付いて行くが、夜逃げをしてからは学校に通っていない」。
- 「就職した時期に両親が離婚し、二人とも自分を残して行ってしまった」。
- 「学力的には県内の有名私立高校への進学も可能と言われたが、ちょうど母親が離婚し、母のパート勤めだけでは経済的に厳しいことを知り、働き始めた」。

- 「中学校の頃、児童相談所が介入して、児童福祉施設などに半年ほど入所していたことがあった」。
- 「父親が仕事もせず酒ばかり飲んでいたので、小学校 5 年生の時に母親が家から出て行った。父親の暴力等のため家出をした。警察に補導され児童養護施設に入った。中学校の卒業式後、再婚した実の母親が迎えに来た。親の決めた新聞配達の仕事をするようになったが、家にお金を入れさせられ、親はそのお金で遊んでいた」。
- 「両親が離婚し、生活保護を受け、母親の実家で生活していた。施設に入所していた時期もあった」。
- 「中学に入ってから家の借金のため夜逃げ同然に引っ越した。両親共にギャンブルとお酒が好きだった。中学卒業後、親の勧めで就職をした。給料から 5 万円は家庭に入れていた」。
- 「父は酒の量が多く、酒乱だった。母親はそれが理由で離婚し、3,4 歳の頃に出て行った。酒乱の父が嫌いだったため、中学卒業後、家を出て働きに行った」。
- 「父親のギャンブルが原因らしく、小学校の頃には借金があり、現在も借金を抱えている。お金がなかったので高校には行けなかった」。
- 「父親は無職で、母親は水商売をしていた。中学卒業までのことについては、顔が曇り話しながらない」。
- 「4、5 歳の時に両親が離婚し、祖父母に育てられた。生活保護を受けていた。経済的な理由で高校には進学できなかった」。
- 「中学 3 年生の時に、母親がサラ金から借金を作って蒸発した。その頃から父は暴力を振るようになった。自分もグレ始め、友人宅に入り浸ったり、暴走族に入ったりした。シンナーも吸引した」。

中学校卒業で就業して行った人たち全員から家庭の状況について詳しく話を聞いた訳ではないが、少なくとも 22 件中の 12 件のケースが家庭に事情を抱え、就業せざるをえない状況にあったことがわかる。そして、“両親の離婚”、“借金”、“家庭内暴力”などの問題が多いことが伺える。

3.3 高等学校中途退学者の実態

3.3.1 就職先について

高等学校を中途退学し、就業している人たちがどのような職に就いていったのか、その実態を年代別に見てみたい。

- 10 歳代の人の場合 「定時制高校に進学し、色々なアルバイトを経験した。定時制高校中退後、ブラブラしていたが親の知人の紹介でプラスチック工場に入社した」。
- 20 歳代の人の場合 「高校中退後、数年遊んで暮らした。その後、仕事が見つからず父親のトラックの荷物運びの手伝いをした」、「高校に通いながら、朝は新聞配達、夜は焼き鳥屋のアルバイトをした。高校を中退し、焼き鳥屋で働いた」、「高校を中退し、16 歳からスナックで働いた」。
- 30 歳代の人の場合 「高校に進学するがいじめにあい退学した。17 歳より仕事に就いた」、「在日に対する差別のことで高校を中退した。すし屋の見習いとして働くが親方の差別的な言動もあり辞めた」、「小学校 6 年生の時から新聞配達のバイトを始めた。高校は自分のお金で通っていたが中退した。その後、求人誌で見つけた居酒屋の住み込みの仕事に就いた」。
- 40 歳代の人の場合 「高校に進学するが、父が体を壊したこともあり、職安で飲食店の仕込みの仕事を見つけ、退学した」。

50 歳代の人の場合 「中学卒業後、親戚を頼って他県の高校に行くが中退した。17 歳から東京でバーテンダーの仕事に就いた」。

高等学校中途退学者の場合は、どの年代の人たちを見てもほとんどが正社員として就業してっていないと思われる。仕事の内容は飲食店ばかりで、自分で仕事を見つけたり、アルバイトの延長といたりした形で仕事に就いているケースが目立つ。中学校を卒業し、就業していている人たちと比べると、高等学校を中途退学して就業していく人たちの方が就業する上で厳しい状況にあると言える。

3.3.2 家庭環境について

高等学校を中途退学し、就業していった人たちの家庭環境について見てみたい。

- 「東南アジアに生まれ、3 歳の頃日本に来た。定時制高校に進んだ後は色々なアルバイトをした。その時、家計は別々で食費も自分で稼いでいた」。
- 「高校在学中、北朝鮮に対する差別が原因でケンカとなり退学になった。その後、就職先の親方にもお前ら北朝鮮のもんはとイヤミを言われるのが嫌で退職した」。
- 「幼い頃から両親がおらず、祖母に育てられて来た」。
- 「父親が 16 歳の時に亡くなった」。
- 「子ども時代は、姉や長男が優遇され、自分は放置されていた。家が貧しかったので、小学校 6 年生の頃から 4 年間、新聞配達を行った。ある時、集金したお金が無くなっていた。母が勝手に持って行き使い込んでいた。しかし、そのお金で遊んだわけではなく、家計に入ったと思うこともできずに黙っていた。高校は自分のお金で通っていた。学費は土日や夏休みに旅館のアルバイト等をして稼いだ。お金も欲しい、新しい服を買っておしゃれもしたいと思い、高校を中退した」。
- 「幼いうちに両親は別居しており母の面影は記憶にない。親類の所や父の知り合いの所に預けられることもあった。父は毎日のように仕事場でも朝から酒を飲んでいて、暴力も当然のようにあった。高校進学後、父が体を壊して入院したため、仕事をみつけて高校を中退した」。
- 「母親は家におらず他の男性という。父親はその筋の人でフィリピン人の経営する店に入り浸りだった。父には借金もあった。中学生の時に、児童相談所を通して児童養護施設に入所した。そこで偶然、実の弟に会った。弟は親戚の間をたらいまわしにされていた。高校には入学したが、1、2 週間でめんどくさくなって辞めた」。

高等学校中途退学者の少なくとも 9 件中の 6 件のケースが家庭に事情があったことがわかる。そして、“差別”、“貧困”、“暴力”、“借金” など家庭が抱える問題が多いことが伺える。

3.4 おわりに

中学校卒業で就業していった人たち、高等学校を中途退学して就業していった人たちともに、本人の意思というより、家庭に何らかの困難な状態を抱えていたがために就業せざるをえない状況が生じていたと言える。それらの人たちの家庭が抱える問題の多くは、離婚による経済的困窮、借金、暴力などであった。

そして、高校卒業の学歴を取得できなかった人たちに対する就業状況はとても厳しいものがある。多くは正社員としての採用ではなく、アルバイトというような実態であった。就業の第一歩から不安定就労状態でスタートして行っていると言える。特に、中途退学をせざるをえない人たちにいたっては、中学校卒

業者よりも厳しい状況にある。そして、その後ほとんどの人たちが派遣、野宿といった道筋を辿っている。

今回、聞き取りを行った人たちの中に結婚経験があり、子どもがいるという人がいた。その子どもの環境は、聞き取りを行った人たちが子どもの時と同じような家庭環境にある。まさに、厳しい環境が再生産されている現状がみられる。